

- 5 エリクソン (Erikson, E. H.) の発達段階における幼児前期の心理社会的危機は、「基本的信頼 対 不信」である。
- 6 エリクソン (Erikson, E. H.) の発達段階における幼児後期の心理社会的危機は、「自発性 対 罪悪感」である。
- 7 エリクソン (Erikson, E. H.) の発達段階における学童期の心理社会的危機は、「同一性 対 役割の混乱」である。
- 8 ハヴィガースト (Havighurst, R. J.) は、その著書『人間の発達課題と教育』（1953年）において、幼児期から老年期までのライフステージについて記述しながら、それぞれの時期に達成すべき課題、すなわち発達課題があることを指摘した。
- 9 バルテス (Baltes, P. B.) は、生涯発達心理学を提起し、個体の発達生涯にわたる過程であることなどを主張した。
- 10 バルテス (Baltes, P. B.) は、成達は、獲得（成長）の段階が完了した後で、喪失（衰退）の段階に進む過程であるとした。
- 11 バルテス (Baltes, P. B.) は、個体の成達は、歴史的文化的条件の影響を受けないとした。

- 23 幼児が家の絵を描くときに、実際には見えない家の中の人物が透けて見えるように描くのは、幼児期に特有の思考であるアニミズムによるものである。
- 24 物に手を伸ばしている人を見て、その人は物を取ろうとしていると解釈するように、他人の行動からその人の心の状態を、自然に、常識的に推察する働きを、ハイダー（Heider, F.）は、素朴心理学とよんだ。
- 25 「心の理論」は、プレマック（Premack, D.）とウッドラフ（Woodruff, G.）が、ヒトの幼児の発達研究を通して提唱した理論である。
- 26 「心の理論」の獲得を調べるための方法としては、「誤信念課題」が用いられることが多い。
- 27 「心の理論」の獲得は、2歳頃から始まるといわれている。

- 33 子どもが、おはじきを1個ずつ指でさしながら「1、2、3、4、5」と声に出して数えることを、数唱という。
- 34 ゲルマン（Gelman, R.）らによると、子どもが正しく計数できるようになるためには、①一対一対応の原則、②安定した順序の原則、③基数の原則、④順序不変の原則、⑤抽象性の原則、の5つの原則の理解が必要となる。
- 35 子どもは、親子関係によって培われた自分へのコンピテンスを自己資源として自我に取り入れ、具体的なストレスや脅威、危機的な課題状況においても、防衛することなく、コーピングができるようになる。
- 36 ピアジェ（Piaget, J.）によると、幼児期の子どもは、皿を拭くのを手伝っていて、誤って5枚割ってしまった場合と、いたずらをしていて皿を1枚割ってしまった場合とでは、いたずらをしていて皿を1枚割ってしまった場合との方が悪いと判断する。
- 37 自己統制の2つの側面のうちの自己抑制面は、3～4歳にかけて急激に発達した後、停滞するが、自己主張・実現面は、3歳から6歳の終わり頃までほぼ一貫して伸び続ける。

- 8 「令和5年版 男女共同参画白書」（内閣府）によると、「子供ができて、ずっと職業を続ける方がよい」と回答した者の割合は、20～29歳の女性より、30～39歳の女性のほうが高い。
- 9 「令和5年版 男女共同参画白書」（内閣府）によると、「子供ができるまでは、職業を持つ方がよい」と回答した者の割合は、20～29歳の男性においては、約4割となっている。
- 10 「空の巣症候群」とは、それまでひとつの物事に没頭していた人が、心身の極度の疲労により燃え尽きたように意欲を失い、社会に適応できなくなることという。
- 11 ソーシャル・コンボイを維持できるかということは、老年期における適応を左右する要因の一つとなる。
- 12 カウフマン（Kaufman, S.）は、高齢者が新たに生み出し、維持するアイデンティティを、サクセスフル・エイジングとよんだ。